

---

# 文字における剰余

ルートヴィヒ・クラゲスにおける手書き文字の概念<sup>1)</sup>

遠藤 浩介

## 1. はじめに

ルートヴィヒ・クラゲスは『筆跡と性格 (Handschrift und Charakter)』の冒頭で、手書き文字 (Handschrift)<sup>2)</sup> を「個人の書字運動の結果 (das Ergebnis der persönlichen Schreibbewegung)」<sup>3)</sup> と定義している。この定義は、筆跡学における手書き文字が個人性、書くという行為、そして視覚性 (書字行為の結果として産出されたもの) という三つの要素を含んでいたことを示している。本稿の課題はこれらの要素の結合関係のうち、とくに書字行為と視覚性の関係を、世紀転換期の文字をめぐるディスクールの変容の一例として解釈することにある。彼の議論は、手書き文字を書字運動によって産出された視覚的な痕跡として捉えることで、記号としての文字という観点を脱構築したのである。

クラゲスにおける筆跡学的名著は、1917年に初版が出版され、以後1954年に没するまで幾度となく改版と改稿を重ねた『筆跡と性格』である。この著作で彼は自らの手書き文字の定義を前提としており、概念をめぐる詳細な議論については1913年に発表された『手書き文字の概念と実態』を参照するよう指示するのみである。<sup>4)</sup> したがってこの『手書き文字の概念と実態』は、クラゲスの筆跡学における理論的前提をなすものとして捉えることができる。同時に、このテクス

---

1) 本稿は学習院大学ドイツ文学会 2010年度秋季研究発表会 (学習院大学、2010年11月2日) で発表した「ルートヴィヒ・クラゲスにおける手書き文字の概念」にもとづいている。掲載にあたり、大幅に加筆修正した。

2) 本稿では、Handschrift という語に「手書き文字」と「筆跡」のふたつの訳語を与え、状況に応じて使い分ける。Handschrift は活字体と対立して「手で書かれた文字」という意味で用いられる。本稿がおもに論じるのはこの意味での Handschrift である。また、『筆跡と性格』で強調されているのは個人と文字の結びつきであり、その意味で「筆跡」という訳語がふさわしい。この観点についての考察は別稿に譲りたい。

3) Klages:1917, S. 1.

4) Klages:1917, S. 157.

トはクラゲスの理論という枠を超えて、筆跡学という学問体系自体の問題とも深く関わっている。というのも、筆跡学は個性の判定という点で観相学の一部でありながらも、手書き文字というメディアに対する独自の意識とアプローチによって特徴づけられるからである。<sup>5)</sup>つまり、筆跡学とは性格判定の術である前に、(手書き)文字論として読まれなければならないのである。

したがって、筆跡学の文化学的分析において、手書き文字概念の検証は欠かすことができない。しかし従来の研究では、筆跡学はもっぱら知の構築とメディアの関係ないしは学問的ディスカールの問題として論じられ、手書き文字というメディアへの意識は自明の前提として考察の埒外に置かれていた。<sup>6)</sup>また文字論や読みの理論の連関でも、筆跡学的文字観の独自性はことのついでに触れられているにすぎない。<sup>7)</sup>このような研究状況にあって、クラゲスの『手書き文字の概念と実態』にはまったく言及すらされていないのが現状である。

『手書き文字の概念と実態』におけるクラゲスの議論の特徴は、文字を書くという規則的な反復行為において必然的に産出される規則違反と、手書き文字を密接に結びつけていることにある。このとき、書字行為のパフォーマンス性とは、デリダの言葉を用いれば、反復する記号における「反覆可能性(itérabilité)」として理解することができるだろう。<sup>8)</sup>デリダはこの反覆可能性を「エクリチュール」における引用可能性をも含めた広い範疇で捉えたが、文字の視覚性という観点に限った場合、ソーニャ・ニーフが指摘しているように、このような反覆可能性と反覆可能性の関係は手書き文字の特質として捉えることができる。<sup>9)</sup>というのも、手書き文字は視覚的な記号を反復させるが、同時に書くごとに一回的なフ

---

5) Vgl. Schmölders:1995, S. 99-108. ここでシュメルダースは、筆跡学が観相学の一部でありながら、同時に手書き文字を一種の絵画として鑑賞し、描写するがゆえに、絵画芸術との接点をもっていると主張している。また、ホルンは筆跡学と観相学の違いをメディアへの意識に求めている (Vgl. Horn:2005, S. 177f.)。

6) たとえばカンマーは 1900 年前後における書く行為をめぐるディスカール転換の文脈で筆跡学を捉えた (Vgl. Kammer:2005, insb. S. 142-149)。19 世紀末のフランスにおける、手書き文字と個人の徴候という知との結びつきについては Kammer:2009 を参照。またエヴァ・ホルンによれば、筆跡学は自己を心理学や歴史学、生理学、文学研究など人間科学のあらゆる分野で有用な補助学問として規定することにより、領域を横断したディスカールを作り上げたとされる (Vgl. Horn:2005)。

7) Vgl. Coulmas:1981, S. 136; Groß:1990, S. 234.

8) デリダ:2002, 22 ページ参照。

9) Vgl. Neef:2008, S. 87-89.

オルムを生み出すからである。このような手書き文字における一回性は、記号が生起する際に付随して現れる物質的な「剰余 (Überschuss)」<sup>10)</sup>として捉えることができる。すなわち、クラージェスにおける手書き文字をめぐる議論は、文字という記号における視覚的な剰余への着目として捉えることができるのである。

以下の議論では、まずロラン・バルトの議論を手がかりとして、手書き文字における記号性と剰余の関係を示す。その後、クラージェスの『手書き文字の概念と実態』に即して彼の文字概念の二重性を論じたのち、「手書き文字性 (Handschriftlichkeit)」という概念を考察する。最後に、文字における「手書き文字性」の具体的な現われ方に焦点を定める。

## 2. 文字記号と視覚的形態

クラージェスの筆跡学が対象としたものは、ロラン・バルトの言葉を用いれば文字における「おまけ」と呼ぶことができるだろう。バルトの文字論はコミュニケーションの道具という観点を否定し、言語の音や意味といったコードと切り離して文字を捉えるよう主張している。<sup>11)</sup> そのひとつの例が、視覚的芸術作品における文字の使用である。すなわちバルトにおいて文字は読む対象ではなく、眺める対象なのである。<sup>12)</sup> このような文字観を下敷きにして、彼は手書き文字に記号性と剰余との二重性を認める。

手で書かれた書を前にしても、われわれが消費するのは、やはり、記号の了解可能性である。しかし、われわれの眼を（そして、すでに、われわれの欲望を）引きとめるのは、不透明な、無意味な—というよりもむしろ、別の意味形成性に属

10) Mersch:2003, S. 42 u. 47.メルシュは名指ししていないが、この概念はデリダの「剰余 (surplus)」概念に由来していると思われる。

11) 「この二十六文字は、それ自体、いくつかの直線と曲線の組み合わせでしかない」(バルト:1986, 2 ページ)。

12) この観る対象としての文字という観点は、彼のデッサンについての言及と重ねて捉えることができる。「古典的なデッサンは確立した記号をまったく読み取らせない。機能的なメッセージも、もはや、まったく生じない。私は私の欲望を、類似のできばえ、技法の冴え、スタイルの魅惑に、一言で言えば、生産物の最終的狀態に注ぎ込む。それは、文字通り、眺めるものとして私に与えられた対象である」(バルト:1986, 176 ページ)。この点で、彼の文字論がアンドレ・マサンやサイ・トゥオンブリ、また日本の書道のように、常に芸術における文字を題材としていることは注目に値する。ここから、文字と他の視覚的メディアないしは芸術作品との関係を指摘することができるだろう。

する一いくつかの要素である。すなわち、文字の神経質な曲がり具合、インクの勢い、縦線ののびやかさ、文字のコードの働きには必要のない、したがって、すでに、おまけであるこうした属性のすべてである。<sup>13)</sup>

このようなバルトの指摘は、手書き文字がもつふたつの構成要素を明らかにしている。すなわち、ひとつには言語的メディアとして文字の記号性であり、いまひとつには文字の曲がり具合や線の曲がり具合など、文字という記号を支える物質性に関わるものである。言語的メディアである手書き文字を読む傍らで、文字という構造の観点から無価値な「おまけ」は「われわれの眼を[……]引きとめる」。したがって手書き文字は読まれる対象であり、同時にまた観られる対象でもある。バルトの議論は、このような手書き文字の二重性を明らかにしたのである。

バルトの議論は、文字記号論が排除した点を明確に表している。ソシュールは『一般言語学講義』のなかで、文字を音声とは区別され、視覚的に固定される言語的記号体系として捉えた。図版1のようにフランス語で/te/を現わす3つの手書き文字は、彼にとって、これらの筆跡の違いが文字を考察するには無価値なものである例証である。「文字の価値は純粹に否定的であり、差異的である。それゆえ同じ人間が *t* を[……] いろいろの書体で書くことができる。肝要なことはただ一つ、この記号が運筆上、*l* や *d* などと混同しないことである」。<sup>14)</sup> ソシュールにおいて文字の「価値」とは、ひとつの記号体系内での区別によって生起する。したがって、肝要なのはひとつの文字(タイプ)が他の文字と混同されないことであり、*t* の様々な書体(トークン)は記号として把握されない。<sup>15)</sup> 同様に、グッドマンも表記体系としての文字の条件を非連結であること(disjointness)と有限に分離可能であること(finitely differentiation)のふたつに求めている。<sup>16)</sup> こうして、書体の区別や運筆の様態は文字記号論の範疇から外れることになる。

しかし同時に、ソシュールが『一般言語学講義』のなかで挙げた3つの手書き文字は、文字の記号論とは別のレベルでの差異を視覚的に提示してもいる。ここで明らかにされた *t* の横棒の角度や長さなどは、むしろグラフィックや造形芸術

13) バルト:1986, 98 ページ。

14) de Saussure/Bailly/DeMauro:1916/1995, S. 167.

15) 文字記号論におけるタイプ・トークンの問題については Wehde:2000, S. 67-70 を参照。

16) Vgl. Goodman:1976, S. 130-141.

の範疇に属する問題となる。<sup>17)</sup> それゆえバルトは、線ののびやかさやインクの勢いなどを、文字の非記号的で感覚的な側面が現われる「おまけ」として捉える。しかし手書き文字においては文字のコードと「おまけ」というふたつの側面が同程度の強度をもって現われてくるがゆえに、「おまけ」は、その言葉とは裏腹に、いわば手書き文字の特性に関わる本質的な要素として捉えられる。こうして、手書き文字は読む対象（コード）と観る対象（剰余）を含んでいるということが明らかにされるのである。

クラークスの視線はバルトが指摘した手書き文字の剰余へと向けられている。ただしバルトとは異なり、クラークスはこの剰余が生み出される経緯を問題にし、また文字記号の知覚可能性を脅かす要素として位置づける。とはいえ、この点を論じる前に、次章では準備段階としてクラークスにおける文字の概念を考察する。

### 3. クラークスにおける文字の概念

ソシュールやグッドマンなどの構造主義的な議論を経た今日では、クラークスが『手書き文字の概念と実態』の冒頭で論じる文字の概念は決して目新しいものではない。クラークスによれば、文字記号とは形象ないしは図式であるが、同時に一定の音を意味し、同一秩序内での他の図式から区別される限りにおいて機能する。<sup>18)</sup> こうして文字記号は形象としての「自立的重要性 (Selbständigkeitsgewicht)」<sup>19)</sup> を失い、「まったく異なった秩序を目指すわれわれの注意のための単なる道しるべ」<sup>20)</sup> となる。すなわち、記号としての文字は、感性的な形の「図式化 (Schematisierung)」と「脱感性感 (Entsinnlichung)」を経たものとして捉えられるのである。

17) ヴェーデによれば、タイポグラフィにおける視覚的な形態は、グラフィックや造形芸術といった視覚芸術との隣接関係で捉えられる。このような指摘は、タイポグラフィと手書き文字との区別を超えて、文字における言語的記号と視覚的形態との側面が場合によっては緊張を孕んだ関係にあることを示している。「文字記号を観察する際には、原則として常に言語的記号としての機能を無視し、もっぱら視覚的な形態 (Gestalt) としての、つまりグラフィカルや物質的な諸特徴 (Merkmale) としての文字記号の特性に注意を向けることが可能である。ここに、タイポグラフィとグラフィックおよび造形芸術との近さの根拠が求められる」(Wehde:2000, S. 70)。

18) Vgl. Klages:1913b, S. 182.

19) Klages:1913b, S. 179.

20) Klages:1913b, S. 179f.

厳密に言えば意味のある理解 (*sinnvolle Auffassung*) とは常に解釈による理解であるが、この理解について言えることは、まさに本来の「記号を読むこと」における理解の特殊な性質に当てはまるのである。「記号を読むこと」は印象を図式化することによって、つまり個々のフォルムにかかわってこのようなフォルムを覆い隠し、その理解を単純化する類型を指定することによって、印象を脱感性化させるのである。<sup>21)</sup>

このような議論は、個々の点で文字記号論とリンクしている。文字記号の視覚的体系性と音声との結びつきという視点は、ソシュールの構造主義的な文字の規定から大きく離れてはいない。フォルムのヴァリエーションと「類型」の指定による文字の同一性という観点は、タイプとトークンの関係として捉えることができる。むしろクラゲスの議論の最大の特徴は、このような文字記号論がテキストの冒頭に置かれているという論理構造にある。つまり文字記号論は、手書き文字の概念をめぐる後の議論で脱構築されることになるのである。

クラゲスにおける脱構築の手がかりとなるのは、書かれたもの (*das Geschriebene*) としての文字 (*Schrift*) という発想である。したがってタイプライターで書かれたものや印刷したものは文字として捉えられない。クラゲスは書くということ、ペンをういた一回の連続する動きであり、方向の定まったものとして捉える。ここから、「デッサンによる文字産出」と「書く行為による文字産出」が区別される。<sup>22)</sup> すなわち、クラゲスは文字と手で書くという行為を結びつけることにより、文字に一定の規則に従った運動の結果としての性格を付与するのである。

ここでのクラゲスの議論には、世紀転換期に起きた書くことをめぐるディスクールの変容との関連が認められる。オフィスとタイプライターの登場を契機として実験心理学や精神医学で起きた書く行為をめぐるディスクールの変容は、とくに書くという行為における手の位置づけを大きく変容させた。<sup>23)</sup> タイプライタ

---

21) Klages:1913b, S. 181, Herv. im Orig.

22) Klages:1913b, S. 178. なお、クラゲスは平面に引掻くという行為やワックスに刻み込むという行為を、書くことの前段階にあるものとして捉える。

23) 1900年頃のタイプライターの登場と書字行為をめぐるディスクールの変化については、Giuriato/Stingelin/Zanetti:2005 を、とくに手と書字行為の関係については Kammer:2005 を

一を打つ「労働する手」の規則正しい動きと、筆跡学の対象となる「表現する手」の区別は、そのひとつの現われである。<sup>24)</sup> また、筆跡学でも筆跡と手の関係が否定された。とくにゲオルグ・マイヤーは「手書き文字」に代わって「脳の文字 (Gehirnschrift)」という概念を提唱する。<sup>25)</sup> すなわちこの時代、書くことをめぐり、ペンと手の関係に対してタイプライターと手という関係が生じただけでなく、手の介在の必然性自体が大きな問いにさらされたのである。

このとき、タイプライターを否定し、手で書くという行為を強調するクラークスに、一種のアナクロニズムを指摘することは可能である。しかし彼の主張の根幹にあるのは、ハイデガーのように「人間の本質的特徴」<sup>26)</sup> としての手の強調ではない。むしろクラークスの視点は書字運動と文字のフォルムの関係へと向けられている。彼は、ペンを持つ手によって多様なフォルムの文字が生み出されるという観点を、「描くこと」と比較して次のように強調している。

書き手は〔文字の〕図式 (Schema) を生み出そうとする際に、とりわけこの図式と意味の似た諸図式との差異にのみ注意を向けるがゆえに、フォルムを決める余地が〔描くときよりも〕はるかに大きくなる。このような余地があるゆえに、書き手は少なくとも基本的な部分を一筆で (in einem Zug) 書き流すことができるのである。<sup>27)</sup>

ここでは、文字を(手で)書くこととデッサンのように描くことをめぐるクラークスの基本的な立場が述べられているだけではない。クラークスが「描くこと」に含めたタイプライターという技術と、手で書くことを区別する根拠も言外のうちに暗示されているのである。タイプライターを用いた場合や印刷では一定のフォルムが生み出されるが、手で書く場合には、はるかに多様な自由度が認め

---

参照。また、クレペリンを中心とする筆圧計 (Schriftwaage) を用いた実験については Schäfer:2005 および Schäfer:2009 を参照。

24) Vgl. Giese:1935.

25) Vgl. Meyer:1925, S. 51. プレーヤーは、筆跡の特徴が手ではなく、大脳部位に由来すると主張している (Preyer:1895, S. 33-45)。なお、ボルクは、筆跡学における脳と書くという行為の結合関係を、脳波計による脳のイメージングをめぐる 20 世紀のディスカールとの連関で捉えている (Borck:2005, insb. S. 93-96)。

26) Heidegger:1982, S. 118.

27) Klages:1913b, S. 182f, Herv. im Orig.

られる。無論、書き手の意識は記号化された文字間の差異へと向けられている。しかし、あるいはその結果、書き手は文字を書き流し、多様なフォームの文字を生み出すことができる。したがって、書く行為は記号としての文字とフォームの多様性という余剰をも生み出すのである。

書くという行為が内包するこの二重性こそが、書き手をめぐるクラゲスの議論の出発点となる。というのも、そもそも書くということが手と結びついてるクラゲスの文字論において、手書き文字 (Handschrift) というトートロジックな呼称自体が、文字でありながらも単なる記号に解消されない何かを示唆しているからである。次章ではこの手書き文字が考察の焦点となる。

#### 4. 規則の充足と違反

クラゲスにおける手書き文字の特徴は「なんらかの特別な方法で書かれたということ」と、「規範から一定の点で逸脱した文字」<sup>28)</sup> という点にまとめられる。すなわち、手書き文字は文字に含まれるが、同時に規範からの逸脱を意味している。このような特殊性ゆえに、クラゲスは規範からの逸脱を指して、文字における「手書き文字性 (Handschriftlichkeit)」という概念を導入する。本章はこの「手書き文字性」の概念から出発しつつ、手書き文字の概念を書字運動の反復／反覆可能性という観点から考察する。

クラゲスは「手書き文字性」という概念を用いることによって、ふたつの規則違反を示している。ひとつは個人にもとづく規則違反である。「書くことそれ自体と、それとは別に個人的に書くことが存在するわけではない。むしろ、個人のみが書くという営為に従事するがゆえに、すべての書くことは個人的なものであらねばならないのであり、[.....] すべての文字、子供の文字や芸術家によって技巧的に書かれた文字は手書き文字性の特徴を備えているのである」<sup>29)</sup>。こうして、書くことは個人的営みとして捉えられる。同時に「手書き文字性」に着目した場合には、読者ないし観る者の関心は、文字を書いた状況の推測と「文字を書いた人物 (Schrifturheber)」<sup>30)</sup> へと向けられることになる。1900年ごろには、このよう

---

28) Klages:1913b, S. 186.

29) Klages:1913b, S. 189, Herv. im Orig.

30) Klages:1913b, S. 188.



な手書き文字と個人性の結びつきは、とくに精神医学や実験心理学において徴候を収集し保存する器具の登場と密接に関係していた。<sup>31)</sup> それに対してクラークスの場合には、個人性の徴候を「手書き文字性」と結びつけ、文字の視覚的な様態に求める。したがって、「手書き文字性」に着目する場合には、文字の記号性ではなく、あくまでも剰余へと注意が向けられるのである。

個人性と結びついたこのような剰余の根拠は、いまひとつの規則違反に求められる。これが書字運動における規則違反である。「規則の充足を意図したにもかかわらず生起する明確な規則違反が、手書き文字的なものに必須の特徴（Zug、筆致）である」。<sup>32)</sup> すなわち「手書き文字性」を生み出すのは、規則的な運動と一定した文字のフォルムを旨とする書字行為において不可避に生起する規則違反である。したがって、書字運動の反復運動は反覆可能性を含んでおり、その帰結として文字のフォルムにも常に一回性が刻印されているのである。

われわれは同じ行為を二回と行うことはないのだから、とくに同じ動きを二度と行うことはなく、書くことによって同じ文字のフォルムを作り出すことはなく、意図した方向や以前に出た間隔の規則を守ることはない。<sup>33)</sup>

ここで注意すべきは、書き手が規則の充足と違反を意識的に決定することができないという指摘である。その都度の書字行為で意図的に規則違反をするということは、彼の考察の埒外にある。むしろこのような規則違反は、書き手の意志に関わらず、ないしは意志に反して、反復運動に付随して起きる反覆なのである。ここから文字のフォルムの一回性が生じる。したがって、「手書き文字性」は文字に付随する剰余であり一回性を指しているのである。

このように「手書き文字性」の概念を用いることで、クラークスは手書き文字における記号としての文字と非記号的な剰余の関係を示した。しかしこの両者が書字運動によって同時に生み出されるのだとするならば、現象としての手書き文字において、記号としての文字と「手書き文字性」は常に混ざり合っている。そ

---

31) Kammer:2009.

32) Klages:1913b, S. 193.

33) Klages:1913b, S. 191.

れでは、このような現象として手書き文字における剰余的要素はどのようにして露わになるのだろうか。そしてクラゲスは剰余をどのような方法で提示するのだろうか。これらの問いは、いずれも文字に対するアプローチの転換を意味している。

## 5. 剰余と文字の反転

「手書き文字性」に着目した場合、文字の記号性は否定される。読者はテキストの中身への関心を失い、また、書体という体系のなかでの同定可能性も否定する。したがって、「手書き文字性」へと向かう手書き文字の認識は、文字に対するアプローチの転換、すなわち読者から観る者への転換を示している。この点を明らかにするために、本章ではクラゲスの挙げる3つの例を考察する。

第一の例は、ポーランド王ジグムント1世（在位1506–1548）の官房文書である（図版2参照）。クラゲスはこの文字を、一方で「厳密な規則正しさと熟練した動きの模範」<sup>34)</sup>と呼び、その整った形を強調している。しかし同時に、微細な部分への彼の視線は、それぞれの文字に見られる不規則性を明らかにする。

„conjungi“（1行目）、„gras“（4行目）、„insignem“（4行目）、„glorie“（5行目）、„reiligione“（5行目）に5回登場するgのディセンダーの湾曲部は、そのはじめの部分や膨らみ、幅、そして筆圧の強さという点でなんと大きく異なっていることだろうか。„vestre“（2行目）と„nostris“（4行目）では、sとtの結合の仕方がなんとまちまちであろうか。これはまた、1行目と2行目、5行目でのcとtの結合の仕方で同様である。<sup>35)</sup>

クラゲスの関心はテキストの意味ではなく、個々のアルファベットの膨らみやね、結合の仕方へと向けられている。彼はこのような、文字の範疇では無意味な要素に、「手書き文字性」の視覚的な現われを捉える。これらはいずれも、書く際の厳密な規則性への志向に隠れた規則違反である。こうしてクラゲスは、書かれた文字に現われる個々の一回的な要素へと注意を向け、その現れ方の差異

34) Klages:1913b, S. 192.

35) Klages:1913b, S. 192.

に着目するのである。

ジグムント1世の例は、専門の教育を受けた書記が筆の動きに注意を払って書いた、極めて規則正しい筆致である。このような筆跡の対極にあるものとしてクラゲスが挙げるのが、ナポレオンのものとされる、「書くことになれた人物が折をみて極めて急いで書き流した、誰も〈解読〉することができない」<sup>36)</sup>筆跡である(図版3参照)。これらの例からクラゲスは、「文字の形態を極度に疎んじた状態から、模範を遵守する多大な努力」<sup>37)</sup>へと至る諸段階を、「手書き文字的なものの無数の段階の可能性」<sup>38)</sup>として捉える。すなわち、「手書き文字性」が最大限に現われた文字は、書くこと自体を意識せず、自動化された行為の結果として捉えられるのである。

図版3が示しているような、高度の「手書き文字性」を有する「誰にも〈解読〉することができない」手書き文字は、フォルムの個性と文字の読みやすさのあいだの緊張関係を明らかにする。すなわち、手書き文字は文字であるがゆえに、理論的には反復可能でかつ同定可能なものでなければならない。しかし同時に、手書き文字はその一回性と規則違反ゆえに解読不可能なものになる可能性を含んでいる。この緊張関係は、タイプライターが普及した世紀転換期において、文字をめぐるディスクールのひとつの特徴をなしている。タイプライターと異なり、読みづらい手書き文字は「急いで読むことを妨げ、それゆえ時代遅れで歓迎されない」<sup>39)</sup>。また、読みづらさは読み違いを誘発し、商業取引で「損害」<sup>40)</sup>を生み出す原因になると批判される。したがってクラゲスが挙げた判読不可能な筆跡は、まさにこの時代、手書き文字のプロトタイプとも呼ぶべきものだったのである。このような読みづらさが、文字のフォルムへの関心を呼び起こす。クラゲスは、彼が最初にした筆跡学についての著作である『筆跡学的諸方法』(1898年)で次のように述べている。

しかし書かれたものが見た目に明瞭さを欠き、読者が困難を覚えるようになると、

36) Klages:1913b, S. 190.

37) Klages:1913b, S. 190.

38) Klages:1913b, S. 189.

39) Heidegger:1982, S. 119.

40) Burghagen:1898, S. 24. また、遠藤:2010, 99 ページも参照。

アルファベットのフォルムに注意が向くようになる。<sup>41)</sup>

このような認識がクラゲスの筆跡学と文字論の出発点にある。そして彼は17年後に出版された『筆跡と性格』初版でも、読みづらい状況を作り出すよう筆跡学の初心者に対して勧める。その具体的な方法とは、「書かれたものの上下を反転させ、そのうえ文字のあいだの〈視覚的な間隙〉へと注意を向ける」<sup>42)</sup> ことである。こうして、文字は読まれるものではなく、むしろそのフォルムを観察すべきものとなる。この経緯を、クラゲスは「図版 16」(図版 4 参照)をもちいて次のように述べている。

これらの文字の上下を逆さまにし、あたかも装飾であるかのように観察するがよい。この文字の「非有機的な」構成ゆえに、ほとんど身体的とも呼べる不快感を押しさえることができないだろう。動きにおけるすべての自然な「波の打ち寄せ」を、アルファベットの下に突き出た部分のふくらんだ湾曲部が中断させ、終わらせてしまっているように思われる。そしてあるときには行と行が狭く、あるときには広く、あるときには近づき、あるときには力なく離れていくが、これにより、行間のスペースは重心を欠き、その配置はこの「波の打ち寄せ」と完全に諍いを起こしているのである。<sup>43)</sup>

テキストの紙の上下を反転させ、意識を背景の白い紙に向けることにより、もはや文字は「波の打ち寄せ」という線のリズムへと解消される。こうして、「装飾」となり、線の連続と中断や行間の揺らぎによって特徴付けられた手書き文字は、もはや記号性を剥奪され、言語との結びつきも失い、心理的印象を呼び起こす「感覚的な現われ」<sup>44)</sup> となる。したがって、文字の上下の反転は、言語と文字の結びつきを否定し、文字の剰余としての「手書き文字性」を浮かび上がらせる操作なのである。

ジグムント 1 世の官房文書、ナポレオンの直筆文字、そして逆さまにした「図

---

41) Klages:1898/1968, S. 11.

42) Klages:1917, S. 3.

43) Klages:1917, S. 3f.

44) Klages:1920, S. 41.

版16」は、いずれもクラークスが手書き文字を捉える際の関心の方向を現わしている。いずれの場合も彼の関心は、記号としての文字に内在する剰余として「手書き文字性」を浮かび上がらせ、中心的なものとして捉えることにある。最終的には、手書き文字は「装飾」となり、観る者に心理的反応を喚起するメディアとなる。文字の反転の例が『筆跡と性格』の冒頭にあるのは偶然ではない。筆跡学にとって肝要なのは線の様態と観る者の心理的反応である。したがって、筆跡学は記号としての文字が否定されたところで始まるのである。

## 6. おわりに

これまで考察してきたように、クラークスが手書き文字と呼ぶことで強調したのは、書字行為によってもたらされた、文字における剰余である。したがって感性化と非類型化がクラークスの手書き文字論の特徴となるが、これはタイプライターの登場によって生じたメディア競合の産物である。線として理解された手書き文字は、感性的なものであり分節化され得ない塊として捉えられる。こうして、手書き文字は文字における観る対象であるだけでなく、観る者に対して一定の心理的反応を呼び覚ますメディアとなる。

このように捉えられた手書き文字が筆跡学の出発点となる。しかし筆跡学は塊を腑分けし、各要素へと解体／分析する作業である。この作業のなかで、手書き文字の感性的および非典型的様態は新たに類型化される。したがって、筆跡学はなによりも文字記号としての分節化を否定しつつ、手書き文字を新たに記号として解体し、体系を組み立てる作業なのである。<sup>45)</sup>

筆跡学における手書き文字の記号化は、大きくふたつの点に見受けられる。ひとつには、「個人的リズム」<sup>46)</sup>という概念を介した筆跡と個人 (Individuum) の結合である。この概念は個々の筆跡で規則違反が現れる個人的傾向を指している。こうして、クラークスの手書き文字論はリズムの思想と密接に関わってくる。<sup>47)</sup> 個

45) クラークスはここで、「診断というジ・インテリジェの学問」を目指すための「分析的な半面」として筆跡学を捉えている (Klages:1910/1968, S. 8, Herv. im Orig.)。

46) Klages:1910/1968, S. 48.

47) ただし、クラークスの手書き文字論はリズム論である『リズムの本質』よりも時代的に先行している点は注目すべきであろう。『リズムの本質』は、1926年に論文として発表され、後に大幅な改稿を経て書籍化されたが、これはいずれもクラークスの筆跡学理論の大枠が完成した後の出来事である。その意味で、クラークスのリズム論は筆跡学が

人という概念は、いったんは否定された反復可能性の回帰として捉えることができる。したがって、クラークスの筆跡学は、19世紀後半に現れた「推論的範例」<sup>48)</sup>を背景として、手書き文字による性格の判読可能性を理論化するものである。

もうひとつの例は、筆跡の意味づけである。筆跡にはそれぞれ肯定的か否定的な意味が割り当てられる。たとえば規則的な書体は書き手の意志の強さと、同時に感情の弱さの両方を意味している。このような相対立する意味を構造化した一覧表が、クラークスの筆跡学の特徴となる（図版5参照）。<sup>49)</sup>クラークスが『筆跡学の諸問題』と同じ年に出版した『性格学の諸原則』は、まさに筆跡学における意味論的側面の体系化に他ならない。<sup>50)</sup>このような体系には、クレッチュマーの類型論に基づいた性格分析や、アウグスト・ザンダーのポートレート写真に認められる類型論的な視線など、この時代の類型への欲望との連関を指摘することができるだろう。他方で、手書き文字の形に対する心理的反応は「形式レベル (Formniveau)」という概念にまとめられ、性格学の意味構造にもとづく筆跡判定の方向性を決定する。この方法論はのちに表現学 (Ausdruckskunde) として体系化されることになる。<sup>51)</sup>こうして、筆跡学は性格学および表現学と密接に結びつきつつ、手書き文字を分節化し、個人の性格を現わす記号として解釈する。この意味でクラークスにおける手書き文字の概念は、一方では筆跡学の前提でありつつ、同時に筆跡学によって否定される運命にあるのである。

---

ら出発しているという仮説を立てることができるだろうが、詳しい検証は別稿に譲りたい。

48) ギンズブルグ:1988、とくに 177-226 ページを参照。

49) Vgl. Avé-Lallemant:1989.

50) その証左が、『筆跡学の諸問題』と同じ年に出版された『性格学の諸原則』(1910)である。もともとクラークスは『筆跡学の諸問題』第4部の一章と第5部で性格学について論じる予定だったが、その後、章で扱う範囲を大きく超えてしまったために方針を転換して『性格学の諸原則』を記した (Vgl. Klages:1910/1968, S. 7, Anm. 3)。

51) Vgl. Klages:1913a.

## 7. 図 版

図版 1



図版 2



図版 3



図版 4



図版 5





## 8. 参考文献

- Avé-Lallemant, Ursula (1989), „Das graphologische System Ludwig Klages“, in: Avé-Lallemant, Ursula (Hg.), *Die vier deutschen Schulen der Graphologie. Klages - Pophal - Heiss - Pulver*, München, Basel: Ernst Reinhardt, S. 9–46.
- Borck, Cornelius (2005), „Schreibende Gehirne“, in: Borck, Cornelius; Schäfer, Armin (Hg.), *Psychographien*, Zürich: Diaphanes, S. 89–110.
- Burghagen, Otto (1898), *Die Schreibmaschine. Ein praktisches Handbuch enthaltend alles Wissenswerte für Lernende wie für praktische Maschinenschreiber. Illustrierte Beschreibung aller gangbaren Schreibmaschinen nebst gründlicher Anleitung zum Arbeiten auf sämtlichen Systemen*, Hamburg: Verlag der Handels-Akademie.
- Coulmas, Florian (1981), *Über Schrift*, Frankfurt a.M.: Suhrkamp.
- Giese, Fritz (1935), „Psychologie der Arbeitshand. Mit 252 Abbildungen“, in: Abderhalden, Emil (Hg.), *Handbuch der biologischen Arbeitsmethoden. Abt. VI: Methoden der experimentellen Psychologie. Teil B/II*, Berlin; Wien: Urban & Schwarzenberg, S. 803–1124.
- Giuriato, Davide; Stingelin, Martin; Zanetti, Sandro (Hg.) (2005), „*Schreibkugel ist ein Ding gleich mir: von Eisen*“. *Schreibszenen im Zeitalter der Typoskripte*, München: Fink.
- Goodman, Nelson (1976), *Languages of art. An approach to a theory of symbols*, 2. ed., Indianapolis, Ind: Hackett.
- Groß, Sabine (1990), „Schrift-Bild. Die Zeit des Augen-Blicks“, in: Tholen, Christoph; Scholl, Michael O. (Hg.), *Zeit-Zeichen. Aufschiebe und Interferenzen zwischen Endzeit und Echtzeit*, Weinheim: VCH, Acta Humaniora, S. 231–246.
- Heidegger, Martin (1982), *Parmenides. Gesamtausgabe Abt. 2, Vorlesungen: 1923-1944. Bd. 54.*, Frankfurt am Main: Klostermann.
- Horn, Eva (2005), „Der Mensch im Spiegel der Handschrift. Graphologie zwischen populärer Selbstforschung und moderner Humanwissenschaft“, in: Assmann, Aleida; Gaier, Ulrich; Trommsdorff, Gisela (Hg.), *Zwischen Literatur und Anthropologie. Diskurse, Medien, Performanzen*, Tübingen: Narr, S. 175–199.
- Kammer, Stephan (2005), „Graphologie, Schreibmaschine und die Ambivalenz der Hand.

- Paradigmen des Schreibens um 1900“, in: Giuriato, Davide; Stingelin, Martin; Zanetti, Sandro (Hg.), *„Schreibkugel ist ein Ding gleich mir: von Eisen“*. *Schreibszenen im Zeitalter der Typoskripte*, München: Fink, S. 133–152.
- Kammer, Stephan (2009), „Symptome der Individualität. Das Wissen von Schreiben (1880-1910)“, in: Wittmann, Barbara (Hg.), *Spuren erzeugen. Zeichnen und Schreiben als Verfahren der Selbstaufzeichnung*, Zürich; Berlin: Diaphanes, S. 39–68.
- Klages, Ludwig (1898/1968), „Graphologische Methoden“, in: Klages, Ludwig, *Sämtliche Werke*, Bd. 8, Bonn: H. Bouvier, S. 7–38.
- Klages, Ludwig (1910/1968), „Die Probleme der Graphologie. Entwurf einer Psychodiagnostik“, in: Klages, Ludwig, *Sämtliche Werke*, Bd. 7, Bonn: H. Bouvier, S. 1–284.
- Klages, Ludwig (1913a), *Ausdrucksbewegung und Gestaltungskraft*, Leipzig; Berlin: Engelmann.
- Klages, Ludwig (1913b), „Begriff und Tatbestand der Handschrift“, in: *Zeitschrift für Psychologie und Physiologie der Sinnesorgane*. 1. Abt.: *Zeitschrift für Psychologie*, 63, S. 177–211.
- Klages, Ludwig (1917), *Handschrift und Charakter. Gemeinverständlicher Abriss der graphologischen Technik*, Leipzig: Barth.
- Klages, Ludwig (1920), *Handschrift und Charakter. Gemeinverständlicher Abriss der graphologischen Technik*, 2. wesentlich verm. Aufl., Leipzig: Barth.
- Mersch, Dieter (2003), „Das Ereignis der Setzung“, in: Fischer-Lichte, Erika; Horn, Christian; Umathum, Sandra; Warstat, Matthias (Hg.), *Performativität und Ereignis*, Tübingen: Francke, S. 41–56.
- Meyer, Georg (1925), *Die wissenschaftlichen Grundlagen der Graphologie. Vorschule der gerichtlichen Schriftvergleichung*, Zweite Auflage bearbeitet und erweitert von Hans Schneickert, Jena: Gustav Fischer.
- Neef, Sonja (2008), *Abdruck und Spur. Handschrift im Zeitalter ihrer technischen Reproduzierbarkeit*, Berlin: Kulturverl. Kadmos.
- Preyer, William (1895), *Zur Psychologie des Schreibens. Mit besonderer Rücksicht auf*

- individuelle Verschiedenheiten der Handschriften. Mit mehr als 200 Schriftproben im Text nebst 8 Diagrammen und 9 Tafeln*, Hamburg [u.a.]: Voss.
- Saussure, Ferdinand de; Bailly, Charles; DeMauro, Tullio (1916/1995), *Cours de linguistique générale*, éd. critique, Paris: Payot.
- Schäfer, Armin (2005), „Lebendes Dispositiv. Hand beim Schreiben“, in: Borck, Cornelius; Schäfer, Armin (Hg.), *Psychographien*, Zürich: Diaphanes, S. 241–265.
- Schäfer, Armin (2009), „Spur und Symptom. Zur Erforschung der Handschrift in der Psychiatrie um 1900“, in: Wittmann, Barbara (Hg.), *Spuren erzeugen. Zeichnen und Schreiben als Verfahren der Selbstaufzeichnung*, Zürich; Berlin: Diaphanes, S. 21–38.
- Schmölders, Claudia (1995), *Das Vorurteil im Leibe. Eine Einführung in die Physiognomik*, Berlin: Akademie Verl.
- Wehde, Susanne (2000), *Typographische Kultur*, Tübingen: Niemeyer.
- 遠藤, 浩介 (2010), 「文字と絵のあいだーフラクトゥーア・アンティカ論争における文字の視覚性をめぐるディスコース」, in: 『学習院大学文学部研究年報』, 第 56 輯, 93–116 ページ.
- ギンズブルグ, カルロ (竹山博英 訳) (1988) 『神話・寓意・徴候』 (せりか書房) .
- デリダ, ジャック (高橋哲哉 増田一夫 宮崎裕助 訳) (2002) 『有限責任会社』 (法政大学出版局) .
- バルト, ロラン (沢崎浩平 訳) (1986) 『美術論集ーアルチンボルドからポップ・アートまで』 (みすず書房) .

(えんどう・こうすけ 学習院大学文学部助教)

# Überschuss in der Schrift

## Zum Begriff der Handschrift bei Ludwig Klages

KOSUKE ENDO

Die vorliegende Arbeit stellt die These auf, dass Klages mit seinem Begriff der Handschrift auf den nicht-semiotischen, im Akt des Schreibens mitproduzierten Überschuss in der Schrift aufmerksam wird und deren Zeichenhaftigkeit (und Leserlichkeit) zu dekonstruieren versucht, indem er beides gegeneinander ausspielt.

Die mit der Hand geschriebene Schrift besitze, Roland Barthes zufolge, neben dem sprachgebundenen Code „Zusätze“ wie den Tintenfluss, den Verlauf der Striche oder all dasjenige, was der semiotischen Funktionalität der Schrift nicht diene. Während der Code der Schrift Gegenstand des Lesens sei, würden die nicht-semiotische „Zusätze“ den Blick des Lesers auf sich ziehen; sie würden zum Gegenstand des Sehens werden. Damit hebt Barthes das nicht-semiotische Gesehene in der Schrift hervor, das sich weder mit dem System der visuellen Differenzialität (Saussure und Goodman) noch mit der Type-Token-Unterscheidung begreifen lässt.

Während aber Barthes die Duplizität der Handschrift nur hervorhebt, ohne nach ihrer Generierung zu fragen, so radikalisiert Klages diesen Aspekt, indem er im Akt des Schreibens eine notwendige Gesetzüberschreitung trotz beabsichtigter Gesetzeserfüllung sieht. Damit plädiert er vor dem Hintergrund der Medienkonkurrenz um 1900 nicht nur für das Handschreiben gegenüber der Schreibmaschine, sondern begründet auch die Generierung der Duplizität darin, dass durch das Schreiben neben der zeichenhaften Schrift der unbeabsichtigte Überschuss in Erscheinung tritt. Klages nennt ihn die „Handschriftlichkeit“ als das Ergebnis der Schreibbewegung: Sie ist es, die zwar von der Schrift abhängt, doch deren leserliche Funktionalität zum Erliegen bringen kann.

Es gehörte zur Voraussetzung der Klages'schen Graphologie, die handgeschriebene Schrift zum gesehenen Gegenstand zu machen, indem die „Handschriftlichkeit“ herausgearbeitet wird. Zu diesem Zweck entwickelt Klages u.a. drei Operationen:

den mikrologischen Blick, der sich auf die winzigen Unregelmäßigkeiten der Schriftformen richtet; die Hervorbringung der hingeworfenen Handschrift, die als Schrift nur schwer oder nicht ‚entzifferbar‘ ist; die Umdrehung des Blattes, die die Handschrift zum „Ornament“ und damit zum Medium macht, das eine psychologische Reaktion des Betrachters (nicht des Lesers) hervorruft.